

小山政憲先生の相撲論

賀川光夫

1972年10月3日大分大学教育学部学部長室に小山先生を公式訪問した。本学の英文学科に正式に招聘するためであった。先生とはずい分古いお付き合いをもっていたが、この時の話しには、先生の人柄が一番よくあらわれていたような気がする。

小山先生は40年代に、日本全国をゆさぶる大学紛争の時代、教育学部の学部長として、紛争解決にあたられたのであるが、その頃の回想についてである。

最初に、私は闘争指導者の理念や思想という革命的考えについては全く無知であるが、彼等の日夜を問わず活動する徹底した行動力には驚くほかはない。彼等と対する大学側の職員にもこうした行動力が欲しいと言われた。そして「若い職員の新採用にあたっては、重量あげとか、相撲などの試験も加え、学術研究と合せてはどうか」と大へん無口な先生にとってはユーモアのあるジョークを加えて飄々と話された。その日はよほど気分でもよかったのだろうか、私は次にも用件があって早目に引き上げたかったのであるが、なかなかはなそうとはしなかった。先生の教授資格論は次のようなものであった。

学生とよく遊ぶことのできる素質をもった人、この素質が大へんむずかしい。私はこの素質について質問をした。「生来もっている性質・将来発展するもとなる性質」とある素質のことなら、将来ではおそいから、生れつきもっている性質を求めるのは、大学の教官採用の条件としては無理ではないか。」それに対して先生は言われた。「だから重量上げや相撲が採用試験には必要なのである。」わかったようなわからないような答えであるので、しばらくして更に問いなおしてみた。

「学問の素質は第2の問題ですか。」

すると先生は、力があって相撲に強い人は、学生より一段強固な肉体をもっているから、学生はその教官と遊んでもけして喧嘩はしない。学問的素質は、そうした信頼関係から生まれるものであるから、一緒に勉強すればそれからでも充分である。学生の研究課題を本当にこなすということは本来容易でないからこれも学生との相撲になる。

そして更に続けた。「おたくには活動家はおりますか」と。「私の方は反帝学評で、貴学のセクトとは少し違います。それよりも近時活動家の学生よりも右翼学生の指導の方が大変だ、ということを考えています。」それに対して先生は答えた。「右翼の学生は相撲が強くて、とても教官の敵ではないから、これはお手上げですな。私が着任する来年4月までは何とか力の強い右翼学生の始末をつけてもらえるだろうか。」そして大声で笑われた。

昭和48年4月、先生は別府大学文学部英文学科に着任されたが、それから58年3月辞任するまで、先生の口からこのようなユーモアのある話は一度も聞いたことはなかった。私の顔をみると「あの大きなサロンパスはもうありませんか（福岡市に進出のサロンパス工場敷地の遺跡調査の際頂戴した特大のサロンパス）」、とか血圧の話がされた。寒風の時はずっとこたえとみえて、顔をみるとつらさが見える。「先生大丈夫ですか」と言うと、「大丈夫」と答える。かなり厳固なところがあったが、先生の体力は大分大学紛争中の学部長時代に完全にすりへらしたものとみえる。私は本学着任前の「相撲論」を思い出し、先生は、学生と相撲を取り過ぎたな、と考えるようになった。

大学教官採用の相撲論は、先生自からの体験であり、先生の実践課題であったことを今にして思うのである。大分大学紛争は、先生と学生の相撲というか、力くらべて無事平静をとりもどしたのだということを教育学部のK教授より聞いたことがある。今私も当時の紛争中は病に倒れ長い闘病を続けたが、先生よりも少ない相撲を学生ととりつづけたことを寧ろ楽しい思い出としている。